

形式・構造的系列分析の試み (6)

——片口による「事例 K.H.」を用いて——

服部 信太郎
公益社団法人岐阜病院

石橋 正浩
大阪教育大学

はじめに

既報においてはここ数回、片口法により実施された事例を対象として、筆者（石橋）による「形式・構造的系列分析」を通したロールシャッハ法（Rorschach Inkblot Method, RIM）の理解について検討をおこなってきた。

今回は片口自身が実施した「事例 K.H.」のプロトコルをとりあげ、検討を加えてみたい。K.H. は1925年生まれの作家で、36歳の時（1961年）に出版社の企画の一環として片口によるRIMを受検している。K.H. はその9年後（1970年）に45歳で自死を遂げるが、戦後日本の文学界における代表的存在の一人として位置づけられる。

このプロトコルについては、検査を実施した片口自身による解釈（片口, 1966）、継起分析による空井（1974）の解釈、あるいは伊原（2015）による考察などがある。今回、筆者らは日本心理臨床学会第40回大会自主シンポジウムの場において、このプロトコルを検討する機会を得た。本稿は形式・構造解析の立場から話題提供をおこなった服部と、指定討論を務めた石橋により、このプロトコルの形式・構造解析に形式・構造的系列分析の視点を加えて検討をおこなう。

スコア

今回は石橋と服部がそれぞれにスコアリングしたものを、スコアリングの過程での気づきなどとともに提示することにする。なお、スコアリングは両者とも辻・福永（2018）をもとにおこなった。

Card I 7-90

△①鳥が2羽

（石橋）D₃×2: F: +, ±, n, 1: A: CS

・Inq. 「何かにつかまっている」：何につかまっているのかは言及されず。

（服部）W: F: +, ±, l, 1: A×何か: CS

・「鳥」については、Inq. になると「おとぎ話的なもの」「翼を広げて、何かにつかまっている」「大きなワシとかタカとか、そういう猛禽類」と説明。

△②犬の顔

（石橋）WSs: F: +, ,, 1: Ad: CS

・Inq. 「目の玉」：部位については言及されず。

（服部）WSs: F: +, ,, 1: Ad: CS

・①と同様に、後の説明まで考慮すれば「こっち向いている」「ちょっとマンガ的な犬の顔」とFMや（Ad）の可能性が示唆される。

△③真ん中がカブトムシで天使が両側に

(石橋) W: F: +, ±, l, 1: A×(H): CS

- ・なんでカブトムシと天使の組み合わせなのかは言及がない。その意味では Org. d でもよい。

(服部) W: F: +, ±, n, 1: A×(H): CS

- ・「両側に天使が、やっぱりトリみたいな格好でつかまっているという感じがちょっとした」と①での着想をひきずっているか。
- ・「天使」については「顔」くらいしか説明がない（「カブトムシ」にいたっては皆無）。「どこをどう見たのか」よりも「ぼくはスカラベなんか割に好きで」と個人的体験を述べている。
- ・カブトムシと天使の組み合わせについて、確かに図版はそのように見える構造はしているが。
- ・Card I から実施段階で言っていないことを Inq. で言うことが多い。

Card II 17-100

∧①黒いマントを着た人間

(石橋) W: [FC'T×CFreflex]V: -1, ±, l, -: H×Fire: CS

∨②宗教的な儀式

(石橋) 質疑による情報がないためスコア不能とした。

(服部) W: [MC'with C/F(reflex)]V: -1, ±, h, -: H×Cg×Fire: Cds

- ・片口は質疑を聴取していないが「W M±CF, CK (M), Fire」とスコアしている。
- ・「黒いマントを着た人間」「火」をまとめて、後から「宗教的な儀式」と言っているようにも読める。
- ・「頭」は D₃ではなく、D₂上部のよう。赤色を排して形体のみを手がかりに「頭」とすることができなかった可能性が考えられる。
- ・輻輳型図版に対して、「黒いマント (C)」「捧げもって (M)」「火が燃えている (C/F・m)」「ゴワゴワ (T)」「向こうにある (T)」「反映 (reflex)」と決定因が複雑になっている。特に、D₄に対しては「炎」の「反映が足元に映っている」と付け加えているが、だからといって反応の質が良くなるわけでもなく、むしろ複雑さを避けるために省いてもよかった。

Card III 27-130

∧①蝶

(石橋) D₃: F: +p, ., 1: AS

∧②両側に人間が向かい合っている

(石橋) D₂×2: Mpost: +p, ±, l, 1: H: AS

∧③魂がアドバイスを与えている

(石橋) D₁×2: (M): -2, ±, h, -: (H): CS

(服部) W: M with (MC): +p, ±, h, 2: H×(H)・A: CS

- ・「魂」そのものは無形体だが「手」を指摘しているので類人間でスコアするか、あるいは火の玉でスコアするか。いずれにせよ、図版上はそのような構造になっているが、「この2人の人間のもう一つの魂が、なんかこうアドバイスを与えている」とは？
- ・「チョウは形からです... 赤いからかもしれません」と後付け的に色彩に言及（不自然色彩反応か）。

∧④両側の人間がドッペルゲンガーで、蝶々を中にして対決し対峙している

(石橋) ①から③までの反応がここで結果的に Rorschach (1921) の言う継時性結合全体反応になっている。

(服部) dr (D₂×2+D₃): M: +p, -, d, 1: H×Cg×A: CS

- ・一応、②としてスコアするが①ととらえてもよいかもしれない。
- ・Inq. では、検査者が〈まずチョウが一つの独立したものとして…〉と明確化を図ると、一旦は「独立したものです」と応じつつも、すぐ次の話題に移り「カリカチュールみたいな感じ」等、やや一方的に説明を続けている。その上で「ああ、そこお暑いですね、もっとこっちにいらしたら…」と気遣っている。
- ・ここまでの継起ですでに、反応の独立性が悪く、図版に見えたままを継時的に結合させていく傾向が顕著である。またその際には個人的体験や蘊蓄を述べて、反応の合理性を補おうとしている節も感じられる。

Card IV 30-60

△①頭が花になった怪物が

(石橋) 怪物 dr: (FM)post: +p, ,, 1: (A):

ワニのような怪物に Di: F: +, ,, 1: (A)

またがって向かってくる W: (FM): +p, ±, l, 1: (A): AS

- ・Inq. では「突進してくる」と表現。

(服部) W: (M): +p ? , ±, d, 1: (H)×(A)×Sex ? Plt ? : AS

- ・一つの反応としてスコア。
- ・「怪物」「花」「ワニ」は、それぞれ別個に回答されていれば、頻度的にはF+とスコアされる反応であるが、結果的に不適切な結合反応となっている。Inq. では「女性性生殖器みたいな花」と混交反応様の説明もなされている。検査者が介入していないことも一つの要因であろうが、そうした説明がどんどん展開したかと思うと、その後には「こういうのを見るといけないのは」と弁解に転じている。

Card V 8-75

△①蛾、死にかけている

(石橋) W: FT: +p, ,, 1: A: AS

- ・Exner なら MOR がスコアされる反応。「ブワブワ」「ガボガボ」にTをスコア。

(服部) W: FM ? : +p, ±, 1: A: CS

- ・「ブワブワ」「ガボガボ」にTとスコアするか。いずれにせよ、単に「蛾」「コウモリ」とならないのは、多くの人が気にもとめないような微細な図版特徴を反応に反映させようとするから。

△②コウモリ

(石橋) W: F: +p, ,, 1: A: CdS

(服部) W: F: +p, ,, 1: A: CS

Card VI 13-140

△①狐か何かの毛皮

(石橋) W: F: pm, ,, 0: Aobj: CS

(服部) W: F: +p, ,, 1: A×Obj: CS

△②こっちを向いている顔

(石橋) dr: F: +o, ,, 2: Cd: AS

- ・片口はdrとスコアしているがどこを見ているのかは不明。ここでは片口にしたがって便宜的にスコアしておいた。

(服部) Location 不明のためスコア困難

- ・実施段階では「半ば笑っているような、半ば悲しそうな顔」「男の顔か女の顔か」とはっきりしていなかったが、Inq. では、まだ検査者が①について確認している途中から説明を始め、「大学教授みたい」とやや極端に特定している。

Card VII 7-110

△①両側から向かい合っている女の顔 → 全身

(石橋) W/2×2: M·m: +p, ±, l, 1: H: CS

(服部) W: M: +p, ±, h, 2: H: CS

△②ウサギのような感じも

(石橋) W/2×2: FM: +, ±, , 1: A: CS

- ・結局「どっちにも見える」で終わっており、どちらなのか明確にされない。

(服部) W: F: -2 ? , , , -: A: CS

- ・実施段階では「向かい合ってる女の顔」が、「踊っている」のか「逃げようとしている」のか明確にされていない。他方、Inq. になると『イーッ』と言いながらこっちを向いてサーっと逃げようとしている」と内容的にはやや不自然ながらも図版の形状には忠実な説明がなされている。なおかつ、VI②と同様、「ティーン・エージャーの女の子」と限定的。
- ・②の説明の途中で、「やっぱり人間らしい感じがとってしまいます」と①の説明が混入しており、ここでも①と②の独立性が疑わしい。

Card VIII 18-170

△①西洋の昔の紋章

(石橋) W: F: +o, , , 2: Emb: CS

- ・部位を明確に述べているのは両側 D₁ の「ライオン」だけ。

(服部) W: F: +p, , , 1: Emb: CS

- ・両側 D₁ の「ライオン」を除く中央部ははっきりしていない。そうした状況下で、「何かがアレゴリーになっているんでしょうが、それがつかめないだけで」「必ずしもよくみて、なるほどライオンだと思うわけではありません」と弁解している。

△②山の上に城

(石橋) D₄: YF: pm, ±, l, 0: Ls: CS

(服部) D₄: F ? : pm, ±, , l: Na×Arch: CS

- ・「お城」はどこなのか不明。また、「中世紀の山」とは？どちらも明確な説明ないまま、次の反応の説明に移ってしまっている。

△③バラの押し花

(石橋) D₂: FC: +p, ±, , 1: Pl: AS

- ・質疑では「何にもアイデアがない。強いて考えれば、バラの花とか、ああいうものの押し花なんかをつけたような色だなあと思っただけ」と述べているが、これを採用すると決定因はCでもよい。

(服部) D₂: C ? : +p, ±, , 1: Plt: AS

- ・単に「花」でも構わないし(②「山」も同様)、そもそも「何にもアイデアがない」のなら「強いて考え」る必要もない。ただ、①②③を通して図版全体に手をつけたことになる。“何か応えねば”と感じやすいのか。

Card IX 60-145

Λ①お伽噺の魔法使いが長い爪で戦って

(石橋) D₃: (M)C: +p, ±, h, 2: (H): AS

緑色の大きな2羽の鳥 D₂: FC: +o, ±, n, 2: A: AS

火が燃えていて → 雲でもいい D₁: CF: pm, ±, , 0: Fire/Cloud: AS

遠くの方にぼんやりと ... 青い炎の蝋燭が真ん中に D₅: Y/F·m: pm, ±, , 0: Fire: AS

- ・継時性結合全体反応と考えられる反応。片口は「雲」を別の反応としてスコアしている。

(服部) W : [(pseudoMC) with F↔C]×C·m(or CY)×[pseudo FC]V : +o, ±, d, 2: (H)×(A)×Fire(or Cl): CS

- ・石橋が個別にスコアしたものを一つの反応としてまとめてスコアしている。
- ・「上の方は、おとぎ話の魔法使いが長い爪で戦って」と「それをのせているのは緑色の大きな2羽のトリ」の結合は分かるが、それらと「その下の方に火が燃えていて」、「そして遠くの方に (略) 青い炎のローソクが真ん中に立っている」との関連性は不明。
- ・「色があるとイメージネーションが限定されます」と述べているように、D₂「緑色の大きな2羽のトリ」は“緑色を外せなかった”とも考えられる(その場合、不自然色彩反応とスコアされる)。D₄「青い炎のローソク」も同傾向か。また、D₃「魔法使い」については、「非常に児童画かなんかの色と似ていましょう?」と反応生成に際して色彩の関与がうかがわれるものの、一次性的形体色彩複合は成立しておらず pseudo (偽性形体色彩複合) とスコアされる反応。
- ・II 同様、輻輳型図版において決定因が非常に複雑になっている。

Card X 10-185

Λ①イモムシ

(石橋) d₁: FC: +o, ±, , 2: A: AS

クモ D₁: F: +, , , 1: A: AS

カブト虫 → 昆虫類 D₃: F: +, , , 1: A: AS

add. 葉っぱ、クモが持っている D₁₂: CF: pm, ±, , 0: Pl: CS

(服部) W : FC ? : +p, ±, n, 1 : A×Plt : CS

- ・石橋が個別にスコアしたものを一つの反応としてまとめてスコアしている。
- ・①「イモムシ」について、自発的には「格好がこういうふうになっている」と色彩の影響には言及していない。半ば検査者に〈格好からだけ...〉と促されて「格好とそれに緑だから」と答えており、実施段階の時点でFCだったかは微妙。

Λ②ブラジャー

(石橋) D₇: F: +o, , , 2: Cloth: CS

Λ③ブラジャーを両方から支える胎児

(石橋) D₆: M: -1: ±, d, -: H: CS

(服部) dr(D₇+D₆×2): F with Mpost: -2, -, d, -: Cg×H: CS

- ・②と③を一つの反応としてスコア
- ・②「ブラジャー」に続いて「左右の赤いものは、いまだにわからない」部分が、その後に「ブラジャーを支えているのは胎児」と継時的に結合されたと読める。Inq. では、“どこがどうしてそう見えたのか”よりもその生成過程が詳しく述べられているだけ。

Λ④モミジの胚子

(石橋) D₉: F: +o, , , 2: Pl: CS

・カエデの種子と思われる。

(服部) D₉: F: -1 ? , , , -: Plt: CS

表1に、10枚のカードごとにみた初発反応時間、所要時間、カード回転数、反応数を示す。なお初発反応時間の長い順に並べると、IX - III - IV - VIII - II - VI - X - V - I - VIIとなる。また表2は狭義色彩の有無によるカード別にみた反応数、初発反応時間平均、所要時間平均、ならびに反応領域、基礎形体水準、色彩関連反応、運動関連反応の度数を整理したものである。片口(1966)は反応数(R)を25としているが、石橋の集計ではR = 20、服部の集計では19となった。このように評定者ごとにRが異なることも被検者の特徴を反映していると考えられるが、のちに考察を加えることにする。

表1. カードごとの初発反応時間 (R₁T)、所要時間 (RT)、カード回転数 (RC)、反応数 (R)

変数	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
R ₁ T	7	17	27	30	8	15	7	18	60	10
RT	90	100	130	60	75	140	110	170	145	185
RC	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
R (石橋)	3	1(2)	1(3)	1	2	2	2	3	1	4
(服部)	3	1	2(1)	1	2	1(2)	2	3	1	3

表2. 無彩色図版 (I IV V VI VII)、彩色図版 (II III VIII IX X)、全彩色図版 (VIII IX X) の別にみた各種スコアの度数並びに変数の平均

スコア・変数	I IV V VI VII	II III VIII IX X	VIII IX X	全体
R*	10 9	10 10	8 (32.0%) 7(36.8%)	20 19
Ave. R ₁ T	13.4	26.4	29.3	19.9
T/R	47.5	73.0	62.5	60.3
W	9	5	3	14
D*	1 0	5 3	5 3	6 3
d	0	0	0	0
Dd*	0 0	0 2	0 1	0 2
S	1	0	0	1
F+*	9	6	6	15 14
Fpm*	1	1	1	2 1
F-*	0	3	1	3 4

注 * は上段が石橋、下段が服部による集計値である。

把握型について

ここからは服部が冒頭に述べた自主シンポジウムで話題提供した内容を再構成する形で検討を加えることとする。

19 反応中 14 が W とスコアされ、全体反応が優位である。なお、無彩色図版では W=9/9、彩色図版でも 5/10 と図版状況に関係なく全体反応が優位であることが見てとれる。また、W とスコアされた 14 の反応のうち、結合全体反応が 8 を占めている（Ⅰ①③、Ⅱ①、Ⅲ①、Ⅳ①、Ⅶ①、Ⅸ①、Ⅹ①）。

結合全体反応を示すには、「個々の独立体の認知という相とその結合の相という、複数の相を同時にひとつに統合してとらえる能力」（辻, 1997）を必要とする。したがって、結合全体反応の多さは、それだけより高度な認知的作業を行っているという証左となり、一般に知的な高さや安定した情緒性など肯定的に解釈されることが多い。たしかに、事例 K.H. の学歴や業績を鑑みればそうした解釈は妥当なものと言えよう。しかし、示された反応を詳細に検討すると、少なくとも「複数の相を同時にひとつに統合してとらえる」という点においては疑問が残る。

すでにスコアリングの段階でも指摘しているが、例えば Card III では「まん中にチョウがいて…」から始まり「人間が向かい合っているんですが…」→「この 2 人の人の人間のもう一つの魂が、なんかこうアドバイスを与えている」→「この両側の人間がドッペルゲンゲルみたいで、チョウチョを中にして、対決し」と説明が冗長に続いている（その他、Ⅸ①なども同様）。このようなかたちで示される結合全体反応は、Rorschach (1921/1998) が二次性全体反応の一つとして位置づけた「継時性結合全体反応」(sukzessiv-kombinatorische Ganzantwort) に該当する。これらの反応は、「最初にいくつかの部分に意義づけをして、その後に相互に関係づける」という特徴を有し、辻 (1997) が継時性と呼んだ問題を孕んでいる。この継時性の問題については後に改めて述べることとする。

なお、こうした特徴については部分反応においても散見される。部分反応は、彩色図版において D=3, Dd=2 とスコアされた。その内、Dd (ともに dr) については、Ⅲ②「この両側の人間がドッペルゲンゲルみたいで、チョウチョを中にして、対決し対峙しているというような」($D_2 \times 2 + D_3 = dr$) とⅩ②「真ん中の青いのが女のブラジャーみたいにみえました (略) ブラジャーを両方から支えているのは胎児のような感じ」($D_7 + D_6 \times 2 = dr$) である。両者とも継時性の結合反応となっている。

他方、F+% は全体を通して 70 を超えている（無彩色図版だけで見れば 90% 近い）。つまり、結合全体反応のもうひとつの要諦である「個々の独立体の認知という相」については、高い F+% に反映されているようにそれだけ図版特徴を正確に把握し、それに見合った概念を反応として選択していることになる。しかし、それらを図版が示すまま継時的に結合させ、すべてを網羅した何か一つのものとして答えようとしている（その結果、W が優位となる）という点が事例の大きな特徴と言えよう。

このように W 優位傾向と高い F+% が結びつく場合、「固体化が成立してはいるが、状況に配慮的に拘束される、あるいはよりかかる傾向を反映する」（辻, 1997）と言われている。これは、一般的な状況における“これが何に見えるか？と問われたら全体で答えるもの”といった暗黙の前提に縛られやすいことを意味している。つまり、RIM は“全体で見ても部分で見てもどちらでもよいもの”なのに、“これは全体で見えるもの。だから、全体で答えるべきである”と状況を決めつけやすい（思いつめやすい）ということである。

体験型について

色彩反応は以下の通りである。

1. Ⅱ②「黒いマント」(FC)、**「火」**(C)、**「黒いゴワゴワしたマント」**(T ?)
2. Ⅲ①「チョウ」(F↔C ?)

3. VIII③「バラの花とか、ああいうものの押し花なんかをつけたような色」(C)
4. IX①「緑色の大きな2羽のトリ」(F↔C)、「(魔法使いが)昔みたおとぎ話の絵本みたいな色をしている」(pseudoFC)、「火」(C)、「青い炎のローソク」(pseudoFC)
5. X①「イモムシ」「甲虫類」(FC)

このように、色彩反応がすべての彩色図版でスコアされ、色彩刺激への感受性は高い。ただし、「色とは関係ありませんね。全体の形、構図が…フォルムからだけです」(VIII①)や「全く格好からくる印象です」(X①)といった発言からも窺われるように、積極的に色彩について言及するというよりはむしろその影響を排する向きがある。

そうした中で、形体との複合が生じておらず色彩が第一義的になっている純色彩反応、色彩を除外できずそのまま不合理に用いた不自然色彩反応、そして「形体と色彩とを認知する力を有しながら、両者を複合的にとらえる際の内的な葛藤性を、知性化を頼りに回避しようとする性質」(辻, 1997)をもった偽性形体色彩複合が示されている。

事例 K.H. 自身、「色があるとしても限定されちゃって、浮かんでこないな、なんにも…」と述べているように、色彩の処理には苦勞している様子が読みとれる(彩色図版では R₁T が大幅に遅延し、F+% も低下している)。把握型でも述べた“すべてを網羅した何か一つのものとして答えようとする”ことに動機づけられている場合、反応産出は当然のことながら色彩も考慮に入れる方が難易度は格段に高くなるのは当然のことである。

なお、このような RIM 課題に対するアプローチは、課題が漠然図形であるがゆえに必ずどこかで無理が生じる。したがって、被検者は“状況に応じて全体ではなく部分で見る”とか“ここでは色を外して”といった主体的な判断・選択を迫られるわけだが、事例の場合はそのような柔軟な対応をとっていないとも言える。その点、次に述べる運動反応の方は、言ってしまうえば好きなように創作することができる。

運動反応については、II、III、IV、VII、IX、Xにおいて反応が示されている。V①「死にかけたガ」や Location が不明な VI②「半ば笑っているような、半ば悲しそうな顔がこちらを向いている」も含めると、合計8図版において運動反応が示されており、外的な色彩刺激への感受性もさることながら、内的な運動感覚の賦活は一層活発であるように見える。

それらの内容を詳細に見ていくと、例えば IV①「頭が花になった怪物が、ワニのような怪物の上にまたがっている/それがこちらに向かって突進してくる」では、前者の表現は (M) post とスコアされ、後者是对応するスコアが存在しない運動表現が示されている。また、VII①でも「向かい合っている女の顔」(post)、「ポニー・テールみたいな髪の毛が、ずーっと上に飛び上がっていて」(detail)、「踊っているようにもみえるし、あるいは顔を向かい合わせながら、両方へ向かって、反対の方向に逃げようとしているようにもみえる」(内容が確定しない M)、「首だけねじ曲げて」(detail) とスコアの異なる運動表現が混在している。

これらの表現の多くは、個々に見ると図版との適合度が決して悪いわけではない。しかし、X②「ブラジャーを両方から支えているのは胎児のような感じです」(Mpost) に代表されるように、“確かに図版はそうなっているように見えるが、内容としては不自然”という性質を帯びている点で特徴的である。くわえて、運動反応スコアは多いものの、その下位分類は postural movement (姿態運動反応) が多数を占めている。姿態運動反応は、その位置で静止した姿態の表現がなされたときにスコアされ、より F に近いという位置づけとなる。したがって、先の性質は“この漠然図形が何に見えるのか、図版特徴そのままを詳細に記述した結果”として理解できそうである。

継時性について

継時性とは、被検者によって表出された反応が「反応の全貌が認知された上でのものではなくて、表現の時間的推移に対応して順次認知され表現されていることになり、反応認知の時間的独立性に問題がある」ことをとらえる概念である（辻, 1997）。反応がまだ作りかけの状態を表出され、後付け的に反応内容がシフトしていくことになるので、たとえば反応数が1つなのか2つなのか、領域はWなのかdrなのかははっきりしないことが多い（II①, III①, IX①, X②など）。つまるところ、その都度の場当たりの対応ということになる。なお、継時性は特定の疾患や病態において特異的に示されるものではなく、事例 K.H. のように非臨床例であっても示されることはある。また、その示され方もさまざまで、すべての図版で示される場合もあれば、特定の図版で示される場合もある（石橋, 2016, 2019）。

確かに K.H. は、小説だけでなく（それだけでも刊行された作品は非常に多い）、演劇や映画をはじめ、その活動の範囲は広い。しかし、例えば、原稿の締め切りはきちんと守り編集者を困らせることはなかったとか、数々の作品で賞をとりノーベル文学賞候補にも選ばれていたことなどを考慮すると、彼がいつも場当たりの対応をとっていたとは思われない。

ところで彼は、Card I で検査者に「突拍子もないイマジネーションそのまま言ってもいいんですか」と了解を求めている。つまり、自身の着想が「突拍子もない」という自覚は少なからずあったと言える。そうであれば表出しないという選択もあつただろうが、しかし今回の企画をもとにした書籍を出版するにあたってオファーを受けているので、当然“作家らしさを求められている”ということも念頭にはあつたと思われる。加えて、反応段階において、疑いも含めて継時性が認められるのは、II, III, VI, VII, VIII, IX, Xである。したがって、事例が継時性を示したのは了解を求めた後ということになる（I①②③は、反応段階での継時性を認めない）。

また、事例は質疑段階で個人的体験や蘊蓄を述べることが多い。Card I の質疑段階でのやりとりをみると、検査者は③で〈カブト虫と両側の天使は、別々に独立したものとして…〉とそれまでとは異なる導入を行っている。これは、反応段階での「天使が両側にくっついている」という説明からは「カブト虫」と「天使」が2つの反応なのか1つの反応か判断に迷ったのでそれを明確にするためであろう。

対する事例は、「カブト虫がこうあって、それに両側に天使が、やっぱりトリミみたいな格好でつかまっているという感じがちょっとしたんです」と結合反応であることを表明している（「くっついている」→「つかまっている」と微妙に表現がシフトしている）。そしてその流れで、「ぼくはスカラベなんか割に好きなんで…」と個人的体験を述べている。筆者であれば、この後に〈カブト虫はどこがどうなっているのか？〉〈天使は顔以外のところはどこなっているのか？〉などと確認するであろう。しかし検査者である片口は、〈キリスト教的な絵画…〉とやや誘導的ともとれる介入を行い、事例もそれに「そういうものがいつも頭の中にあるのかもしれないね…」と応じ、そのまま Card I の質疑段階が終了している。片口は Card II でも、事例が最初の導入に対して一通り説明した後に、〈どんな種類の人間でしょうか〉という介入を行い、その後「僕はパリにいるときブラック・マジックをみにいったのですからね。こういうものが好きで…」と個人的体験に続いている。

こうした継起をみると、事例の継時性表現や質疑段階での個人的体験や蘊蓄が多いのは、RIM 実施にいたるまでの事情や検査者の介入の影響を大きく受けていることがうかがわれる。とは言え、それでも質疑段階というのは、なぜそう見えたのか理由を答える場面であり、本来ならば図版のどこに見えたのか、図版のどういった特徴からそう見えたのかを答えることが期待される。残された資料には掲載されていないが、おそらくテキストにもあるように、事例は〈いろいろと答えてもらいましたが、これから、それが図版のどこに見えたか、どうしてそんなふうに見えたか、ということについてお尋ねします〉と教示を受けていたはずである。

そうした状況で、（検査者の介入の影響はあるにはせよ）事例 K.H. は個人的な体験や蘊蓄を述べることでもっと

もらしく対応することが多かったことになる。それらは、図版（現実）に基づかない理由であり、置かれた状況や文脈によっては詭弁やこじつけによって難局を乗り切ろうとする傾向があるように思われる。

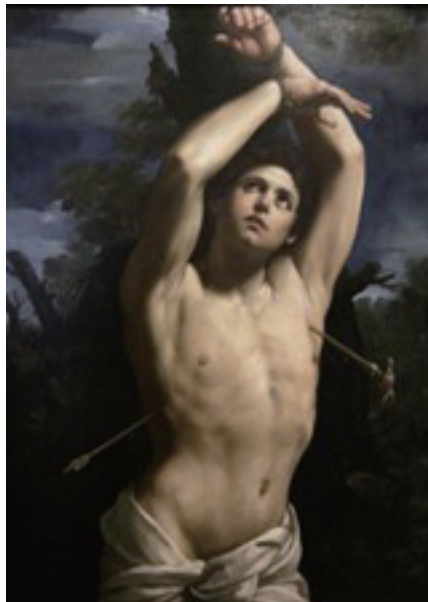
RIM にみられる特徴と『仮面の告白』の照合

ここまで形式・構造的系列分析の観点から事例 K.H. の RIM 上の特徴を述べてきたが、集約すると次の通りである。

1. 図版上のさまざまな特徴を正確に把握し、それに見合った概念を反応として選択している。
2. それらすべてを網羅させた何か一つのものとして回答しようとしている。その結果、しばしば不合理な反応として示されることになる。
3. それを個人的体験や蘊蓄によって合理的に説明しようとしている。

さて、このような特徴を示すのはどのような人物か。形式・構造解析、いわゆる阪大法は他のスクールに比べて数量的な指標に基づいた解釈仮説をもたない。通常は、RIM 上に窺われた特徴と被検者の現病歴などの情報とを照合させながら、被検者の抱える問題を理解し支援につなげようとする。しかし、事例 K.H. は臨床例ではないため、通常の手法が使えない。そこで、RIM 上に窺われた特徴と事例 K.H. の自伝的小説とも言われる『仮面の告白』（三島, 1949）とを照合させることで、事例 K.H. のパーソナリティ理解を試みたい。

この物語は、主人公である「私」が、自分は幼少期からどんなものに美を感じ心惹かれていたのかについて述懐しているところから始まる。以下は、それらの中でもとりわけ「私」に強い衝撃を与えた絵画、ガイド・レーニ作『聖セバスチアン』に関する記述である。



ガイド・レーニ《聖セバスチアンの殉教》1615年頃
キャンバスに油彩（カラー）、127 × 92 cm、ローマ、カピトリーナ絵画館蔵。

《チシアン風の憂鬱な森と夕空との仄暗い遠景を背に、やや傾いた黒い樹木の幹が彼の刑架だった。非常に美しい青年が裸かでその幹に縛られていた。手は高く交叉させて、両の手首を縛めた縄が樹につづいていた。その他に縄目は見えず、青年の裸体を覆うものとしては、腰のまわりにゆるやかに巻きつけられた白い粗布があるばかりだった。(略)

その白い比いない裸体は、薄暮れの背景の前に置かれて輝いていた。身自ら親衛隊として弓を引き剣を揮い馴れた逞ましい腕が、さしたる無理もない角度でもたげられ、その髪の毛のちょうど真上で、縛られた手首を交叉させていた。顔はやや仰向きがちに、天の栄光をながめやる目が、深くやすらかにみひらかれていた。張り出した胸にも、引き緊った腹部にも、やや身を擦った腰のあたりにも、漂っているのは苦痛ではなくて、何か音楽のような物憂い逸楽のたゆたいだった。左の腋窩と右の脇腹に鋭深く射された矢がなかったなら、それはともすると羅馬の競技者が、薄暮の庭樹に凭って疲れを休めている姿かとも見えた。

矢は彼の引緊った・香り高い・青春の肉へと喰い入り、彼の肉体を、無上の苦痛と歓喜の焔で、内部から焼こうとしていた。しかし流血はえがかれず、他のセバスチャン図のような無数の矢もえがかれず、ただ二本の矢が、その物静かな端麗な影を、あたかも石階に落ちている枝影のように、彼の大理石の肌の上へ落としていた》

絵画中央に描かれた矢に射抜かれた裸体の男性に関する記述はもとより、その背景まであますことなく克明な記述がなされている。こうした点は、図版特徴の多くを反映させた結合全体反応が多いことや、例えばⅢ①「この2人の人間のもう一つの魂」といった細やかな表現にも見てとれる。繊細な感受性、豊かな想像力をもち、知識や語彙も豊富で、知的に大変優れていることは明らかである。また、片口も「意外なほど協力的で」と述べているように、新奇な課題であっても真摯に、律儀に取り組む人であることがうかがわれる（YouTubeでは、東大全共闘との討論や高校生からのインタビューに丁寧に応える実際の様子が視聴できる）。

またRIMからは、状況を“これはこういうものである。だからこうすべきである”と決めつけ、それに縛られやすい傾向がうかがわれた。そうした傾向は、「私」の発言の中にも垣間見られる。以下は、「私」が幼い頃からすでに「男性」「死」に対して「美」を感じており、“私は最初からこうなのだ”と断定している一節である。その後も「私」は、このことを軸にして、折に触れては“だからこうなのだ”と論を進めやすい。

《…私が人生ではじめて出逢ったのは、これら異形の幻影だった。それは実に巧まれた完全さを以って最初から私の前に立ったのだ。何一つ欠けているものもなしに。何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けているものもなしに。

私が幼時から人生に対して抱いていた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかった。いくたびとなく無益な迷いが私を苦しめ、今もお苦しめつづけているものの、この迷いをも一種の墮罪の誘惑と考えれば、私の決定論にゆるぎはなかった。私の生涯の不安の総計のいわば献立表を、私はまだそれが読めないうちから与えられていた》

では、このような心性が育まれることになったのには、どのような背景・事情があったのだろうか。

「私」は、代々と続く官僚一家の下に生まれている。そして、とりわけ祖母に溺愛され、制限の多い養育環境の中で育っている。

《祖母が私の病弱をいたわるために、また、私が変わるい事をおぼえないようにとの顧慮から、近所の男の子たちと遊ぶことを禁じたので、私の遊び相手は女中や看護婦を除けば、祖母が近所の女の子のうちから私のため

に選んでくれた三人の女の子だけだった。ちょっとした騒音、戸のはげしい開け閉め、おもちゃの喇叭、角力、あらゆる際立った音や響きは、祖母の右膝の神経痛に障るので、私たちの遊びは女の子が普通にする以上に物静かなものでなければならなかった。私はむしろ、1人で本を読むことだの、積木をすることだの、恣な空想に耽ることだの、絵を描くことだのの方を、はるかに愛した》

気難しい祖母の機嫌に細心の注意を払い、制限の多い窮屈な生活を送る中で、次第に彼が空想に耽るようになっていくことは想像に難くない。そうした背景が、体験型に関連するスコア、特に運動反応の増加をもたらす素地になっているように思われる。空想の世界にどっぷりと浸かるようになり、その中で“これはこういうものなのだ。だからこうするのだ”と決めつけ、思いつめていくような傾向が強まっていったのではないかと推測される。

そんな幼少期を過ごした「私」は、中学生頃になると対人場面に苦手さを感じ、またそのような自分を厳しく律しようとする。

《おそらくこの事情には、そのころから私に芽生えだした・自我のスパルタ式訓練法の要求も与っていた。(この本を書いていることが既にその要求の一つのあらわれである。)幼年時代の病弱と溺愛のおかげで人の顔をまともに見上げることも憚られる子供になっていた私は、そのころから、「強くならねばならぬ」という一つの格率に憑かれだしていた。そのための訓練を、私はゆきかえりの電車のなかで、誰彼の見界なく乗客の顔をじっと睨みつけることに見出した》

事例 K.H. 自身、30歳を過ぎてからボディビルディングや剣道を始め、病弱であった体質を改善させようと努めている(他にも、悪筆や音痴、文体についても訓練を行っていたという逸話が残っている)。こうした一連の行動からは、うまくできない自分をありのまま受け入れることが難しく、そこには強烈な自己否定が働いていたのではないかと推察される。RIM上には、“すべてを網羅させた何か一つのものとして回答しようとしている”という特徴が見られることはすでに述べてきた。そのようなアプローチをとり続けることで、ときにIV①「頭が花になった怪物が、ワニのような怪物の上にまたがっている」といった不適切な結合反応が示されていた。別の言い方をすれば、“ここは手をつけずそのままにしておく”ことができなかつたとも言え、先の行動とも関連しているように思われる。

その後、高校生になった「私」は、友人の姉に恋をするが見向きもされなかつた。いわゆる失恋という喪失体験をすることになる。しかし少なくとも、身の丈を知り悲哀に暮れることにはならなかつたようである。

《二十四歳のこの美しい人は手もなく私を子供扱いにした。彼女をとりまく男たちを見ているうちに、私は自分に女を惹きつけるような特徴が一向ないことがわかって来ていた。それは私が決して近江になれないということであり、ひるがえってまた、近江になりたいという私のねがいは実は私の近江への愛だつたと私に納得させることだつた。

それでいて、私は自分が額田の姉に恋しているのだと信じこんだ。私はいかにも私と同年輩の初心な高等学生がするように、彼女の家まわりのうろついたり、彼女の家のかくの本屋で永いことねばっていてその前をとおりかかる彼女をつかまえる機会を待ったり、クッションを抱きしめて女の抱心地を空想してみたり、彼女の唇の絵をいくつも描いてみたり、身も世もあらぬ様子で自問自答してみたりした》

このように、“こんな風に考える自分はやはり男性に関心があるということだ。したがって友人の姉への気持ちはあくまでポーズなのだ”と結論づけていく。大学生になると、新たに別の女性と知り合うことになる。「私」

は、自らその女性に声をかけ恋仲になっていく。次第に2人の間では結婚が意識されるようになる。以下は、彼女の疎開先（作品の時代背景は第二次世界大戦下）を訪れ、一夜明けて「私」がふたたび東京に戻る場面である。

《「またきつとおいでになるわね」

彼女はらくらくと信じきった調子でいった。それは何か、私に対する信頼というよりも、私をのりこえて・もっと深いものに対する信頼に根ざしているようにきかれた。園子の肩は慄えていなかった。レースの胸がすこし威丈高に息づいていた。

「うん、多分ね。僕が生きていたら」

—私はそう言っている自分に嘔吐を催おした。何故なら私の年齢はこう言うことの方がはるかに欲していたからである。

『来るとも！僕は万難を排して君に会いに来るよ。安心して待っておいで。君は僕の奥さんになる人じゃないか』

私のものの感じ方、考え方には、こんな風な珍奇な矛盾が、いたるところに顔を出した。自分に「うん多分ね」などという煮え切らない態度をとらせるものが、私の性格の罪ではなく、性格以前のものの仕業であり、いわば私のせいではないとはっきりわかっているだけに、多少とも私のせいである部分に対しては、滑稽なほど健全な常識的訓戒を以って臨むのが常だった。少年時代からの自己鍛錬のつづきとして、私は煮え切らない人間、男らしくない人間、好悪のはっきりしない人間、愛することを知らないで愛されたいとばかりねがっている人間には、死んでもなりたくないと考えていた。それはなるほど私のせいである部分に対しては可能な訓戒であったが、私のせいでない部分に対しては、はじめから不可能な要求だった』

この場面の直前で、「私」は彼女に、「次会うときにはプロポーズをしてほしい」と仄めかされている。「私」はそれを感じとり、いざ一步踏み出すかと思いきや途端に引いてしまう。そして、あれこれと理屈をつけて“自分はそもそも彼女に好意など抱いてはいなかった。なぜならば自分は男性を好むから”と結局は関係を絶ってしまうことになる。RIMでは、偽性形体色彩複合や質疑段階における個人的体験や蘊蓄の多用に反映されるように、知的に理屈をこねることで葛藤回避、自尊心の傷つきや不安から防衛を図ることが多かったのではないかと推察される。

おわりに

以上、事例 K.H. の RIM プロトコルについて、石橋と服部によるスコアリングならびに服部による考察を提示した。

冒頭に述べたようにこのプロトコルは、ある出版社の企画で複数の作家に片口が RIM を実施し、作家群の RIM の特徴を検討した際に得られたものである。検査時の様子として片口（1987）は「検査そのものには意外なほど協力的で、むしろ真摯なものすら感じさせた」と述べている。プロトコルからうかがわれる几帳面さからは、すくなくとも検査に対して拒否的ではなかったことが理解できる。いっぽうで、事例は三好行雄（国文学者・評論家）との対談のなかで以下のように述べている（片口、1987）。

三好：「仮面の告白」で思い出したんですが…、Mさん（引用者注：事例のこと）、ロールシャッハのテストをお受けになったことがありましたね。ああいうとき、本気でお受けになっているのですか。

M（事例）：おもしろいから、やってみました。うそで受けたら、おもしろくないでしょ。ただ、ぼくはロールシャッハ・テスト自体は疑問だと思います。あんなもので人間の、精神のパターンが作れるわけではないと

思っている。根底的には、軽蔑してます。

三好：ぼくも、そうだろうと思う。実は、あれを読みましてね。あまりにも、作品を通じて想像する M さんらしい答えが返ってきていたので、あれは M さんの遊びではないかと、ちょっと思ったのですが。

M：それは、だいたいご注文に応じてやる気味も、多分にありますからね。人がソーラン節歌ってごらんと言ったらソーラン節歌うし、安来節歌ってごらんと言ったら安来節歌うし、そういうことはある。作家の場合、何がほんとうだか、わからなくなってしまっていますね。ぼくは作家というのは、そういうものだと思います。

この発言自体が聞き手である三好の「ご注文」に応じたものではないかと思われなくもないのだが、出版社や片口の「ご注文」に応じた RIM へのパフォーマンスの中に、「図版上のさまざまな特徴を正確に把握し、それに見合った概念を反応として選択している」、「それらすべてを網羅させた何か一つのものとして回答しようとしている」。その結果、しばしば不合理な反応として示されることになる」、「それを個人的体験や蘊蓄によって合理的に説明しようとしている」と服部が集約した特徴が見られた。

このプロトコルの検討にあたっては、冒頭で述べた自主シンポジウムがリモートでの開催となり、公刊されているプロトコルを事前に読んでもらった上で参加してもらおうという形態をとるしかなかったという事情があった。片口の『心理診断法』は RIM のテキストとしては国内に広く配布していることから選択した。採録されている事例のなかからどの事例を選ぶかという問題もあったが、ある企画者の意見を通す形で結果的にこの事例 K. H. を選ぶことになった。

形式・構造解析は第二次大戦後の大学病院精神科に入院されていた患者さんの心理の理解に主眼を置いて体系化されてきたという歴史的経緯をもつ (辻, 1984)。したがって臨床においてはしばしば有益な知見をもたらすという強みがある反面、一般的な人格心理検査として RIM を使用する場合、形式・構造解析から言えることは思ったより少ない。この点は今後の課題として検討をおこないたいと考えている。

文 献

- 井原成男 (2015). ロールシャッハ・テストプロトコルからみた三島由紀夫の母子関係と同性愛. お茶の水女子大学人文科学研究, 11, 73-85.
- 石橋正浩 (2016). 形式・構造的系列分析の試み (2): 片口法のプロトコルを用いて. 発達人間学論叢, 19, 47-56.
- 石橋正浩 (2019). 形式・構造的系列分析の試み (5): 片口法のプロトコルを用いて 4. 発達人間学論叢, 22, 37-48.
- 片口安史 (1966). 作家の診断: ロールシャッハテストによる創作心理の秘密をさぐる. 至文堂.
- 片口安史 (1987). 改訂新・心理診断法. 金子書房.
- 三島由紀夫 (1949). 仮面の告白. 河出書房.
- Rorschach, H. (1921/1972). *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments [Deutenlassen von Zufallsformen]* (9te Aufl.). Bern, Switzerland: Hans Huber. [鈴木睦夫訳 (1998). 新・完訳精神診断学. 金子書房.]
- 空井健三 (1974). 三島由紀夫のロールシャッハ反応の再吟味. ロールシャッハ研究, 15・16, 137-147.
- 辻悟 (1984). 治療精神医学への道程. 治療精神医学研究所・関西カウンセリングセンター.
- 辻悟 (1997). ロールシャッハ検査法: 形式・構造解析に基づく解釈の理論とは実際. 金子書房.
- 辻悟・福永知子 (2018). 改定版 ロールシャッハスコアリング. 金子書房.